

「持論」と「自論」、「自説」と「持説」について

漆 谷 広 樹

1 問題の所在

自己の考えを述べることは、決して否定的に捉えられる行為ではない。しかし、報道などで見聞する「ジロンを展開する」や「ジセツを展開する」という表現には、次の例のようにあまり肯定的には捉えられない場合が存している。

- 1) トランプ氏は18日の党大会での演説で「私が大統領なら、ロシアとウクライナの恐ろしい戦争は起きなかった」との持論を展開。(東京新聞 2024.07.21)

例1) では、トランプ氏の考えがあくまで「個人的な、独特な意見」であるものと判断され、広く一般に認められる意見であるとは捉えられない。

- 2) 「高みから大衆を見下ろすという貴族主義的なところに共鳴し、オルテガ思想の一側面を拡大解釈して自論を展開するといった傾向」と批判的だ。(朝日新聞 2020.06.26)

例2) では、「拡大解釈」とあることから、「自分の都合のいいような」意見であることを示しているし、さらに「批判的だ」ともあり、「ジロン」は述べる人にとっては都合の良い意見ではあるが、それを受け取る人が同意できる意見であるかは疑わしい、広く一般に認められる意見ではないという意味になる。いずれの場合にも「持論」や「自論」が、あまり肯定的な意味では使用されていない。このことにはどのような理由があるのだろうか。

また、「ジロン」の表記には、「持論」と「自論」の漢字による場合がある。この「持」と「自」とは、同音ではあるものの、それほど近似した意味を持つ

ているわけではない。しかし、構成される語を見ると近似した意味が存している。これはどのような要因によるのか。本稿では、これらの語の出現状況を観察していき、その使用法について考察していく。

また、本稿では「持論」、「自論」以外に、これに類似した意味を持つ「持説」、「自説」についても扱い、考察を行っていく。

2 「持論」と「自論」について

2.1 辞書での記述

まず、ここでは「持論」と「自論」の辞書での意味や、実際の使用状況について見ていく。それぞれについて辞書の記述から見ていく。

「持論」…「かねて主張している自分の説。いつももっている意見。また、自説を主張すること」（『日本国語大辞典』）

「自論」…『日本国語大辞典』には立項されていない。しかし、「抗論」の意味記述のなかには「自論で他に対抗すること」とあり、「自論」が全く見られない訳ではない。

以下、全15冊の国語辞典について、「自論」がどのように扱われているのかを見ると次のようになる^(注1)。

立項がある場合は次の場合である。

『三省堂国語辞典 第八版』（2022年1月）には、「自論」の立項があり、「自分の考え。自説」との意味記述があり、「「自論」からできたことば。」とも記されている。ただ、これも第七版（2014年1月発行）を見ると、「自論」は立項されておらず、第八版で新しく立てられた項目であることがわかる。

これ以外の14冊には「自論」が立項されていない。このうち11冊は、「自論」については言及が見られない。先の他項目中に語例の見られる『日本国語大辞典』以外では、2冊の辞書で以下のように「誤り」として記載が見られる。

「注意「自論」は誤り」（『学研 現代新国語辞典』）や「〔補説〕「自論」と書くのは誤り。」（『デジタル大辞泉』）の記載などがある。これらでは、誤りとして扱われている。

こうしたことから、「自論」は辞書的にはあまり認められるものではなく、

このことも一般に広がるには制約がかかっている状況である。

それでは、実際にこれらの出現状況や使用状況は、どのようなものであるか、以下見ていくことにする。

2.2 「持論」と「自論」の出現状況

ここでは、コーパスや新聞記事などに、実際に「持論」、「自論」がどのように出現しているのか見ていく。

まず、現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）で「持論」、「自論」を見ていく。文字列検索で「持論」、「自論」を検索すると、「持論」208件、「自論」11件（18.9対1）の割合になり、「持論」の方が多く見られる。「自論」の使用されているレジスターを見ると、11件中3件がブログおよび知恵袋の例であり、残り8件は書籍に見られる例である。「自論」は打ち言葉や話し言葉に近い文章だけで使用されている訳ではないことが分かる。

また、新聞記事による検索では、以下のようになる。

朝日新聞「持論」16542件、「自論」261件（63.3対1）

毎日新聞「持論」12354件 「自論」53件（233.0対1）

いずれも「自論」が少ないのは、コーパスの場合と同じ傾向である。ただ、この数値を見ると毎日新聞に比べ、朝日新聞での「自論」の使用割合が少し高くなっているように見える。これは朝日新聞に「時流 自論」と題されたコラムがあり、これが複数回使用され、延べ204件含まれているためであり、これを除くと57件（290対1）になり、新聞記事での出現傾向は両新聞ともほぼ同様な状況であるものと考えられる。「持論」が先に存在し、これと同音である「自論」が、後発的に生まれたことを示している。

それでは、「自論」はいつごろから見られるようになったのだろうか。以下の各新聞記事で出現時期の古い例について、朝日新聞、毎日新聞以外の新聞記事を含めて見ると、中日新聞では1988年、朝日新聞1985年、読売新聞1998年、毎日新聞1970年である。およそ1970年代以降に使用された場合が見られる。

一方「持論」の出現時期については、『日本国語大辞典』の記述では、『史

記抄』に例が見られる。新聞記事でも「河野広中が5か条の持論を展開」（読売新聞 1883.08.03）のように早くから例が存していることがわかる。

さて、「自論」はどのように出現しているのだろうか。次に毎日新聞の場合を例に出現年を見ていく。毎日新聞には「自論」が53件見られる。これについて出現年と件数を見ていく。出現しない年は除き、次表1にまとめた。

表1

出現年	1970	1987	1988	1990	1991	1994	1995	1997	1998
件数	1	2	3	1	1	1	1	1	3
出現年	1999	2000	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008
件数	2	1	1	8	3	10	2	1	1
出現年	2009	2010	2011	2012	2013	2015	2016	2017	2022
件数	2	1	1	1	1	1	1	1	1

この分布状況を見ると、「自論」は徐々に件数を増やす状況を示す訳ではないことがわかる。2003年から2005年にかけて他の年よりやや多い傾向が見られる。ただ、これは言語が変化とは別の事情があると考えられる。つまり、2006年以降に「自論」が自然に減少するような言語変化が起こったという訳ではない。このことは例えば『蟹工船』（1929）や『雪国』（1935）などに見られた「ら抜き言葉」について、その後の様々な小説などでの使用が、徐々に増加していくという傾向が見られる訳ではないことと同様の事情が存しているのではないだろうか。言語の変化以外の事情として考えられるのは、例えば現代では、Wordで文章を作成する際には、校閲機能により、「ら抜き言葉」や例えば「自論」のように辞書形とは異なる語には青色の二重下線が付される。こうしたことは、本来はこうあるべきだという規範意識が影響していると考えられる。そのことが「自論」を漸増させるのに歯止めをかけた理由と考えられる。

さらに、次の例のように、少し混乱した状況である様子が見えてくる。

まず、毎日新聞に「人生二度就職時代…自論を行く」と題されたコラムがある。その記事内容を見ると、次のようにある。

- 3) 「これからハシゴをのぼりつめても、人や予算の分取り合戦や国会答弁の作文書きなどというつまらぬ仕事がふえるだけ。それよりも“人生二度就職”の持論を実践しよう」と転職に踏み切った。(毎日新聞 1970.08.11)

この例では、コラムのタイトルとしては「自論」が使用され、本文では「持論」が使用されており、両表記が混在している場合である。先に「自論」は朝日新聞でコラムの見出しに使用されている場合を示した。見出しやタイトルでは、読み手の注目を集めるために簡潔であることや、紙幅の都合からも短くまとめることが必要である。そこで縮約という方法が選択される場合があると考えられる。これは「自分の論」や「独自の論」とするよりは、「自論」の方が簡潔であるからである。

また「持論」は、「自分が持っている論」であるので、論の所有者である「自分」とかかわりを持つ意味になる。それは「持」と「自」と意味が近似することになる。そこで「持」と「自」との表記が混同したため、「自」による表記もある程度出現するようになったものと考えられる。

さらに意味の面では、「自論」は、「自」と表記することで、より「個人的」な語感が伴い、「広く一般に認められる考え」ではなく、「自分寄りの考え」というニュアンスが生まれるようになる。一方「持論」の場合では、発言者の持つ論であることから、発言者固有の論であると捉えられると考えられる。

それではコーパスや新聞記事以外で、「自論」がどのように使用されているのか、その状況について見ていく。

2.3 「自論」と「持論」の意味と用法

ここでは、「持論」と「自論」は、どのような意味・用法として用いられているのだろうか。以下見ていく。

まず、「自論」が使用される際に、「自分」の意見について用いられているのか、他者の意見を評する際に用いられているのかという点について見る。

BCCWJの「自論」11件には、どのような特徴があるのかについて見ていく。その多くは、他者の意見を筆者（書き手）が評する場合に用いられている。

これは論の持ち主と筆者（書き手）が異なる場合である。

- 4) 世のなかで、たばこほど、衛生上からだにいいものはない」という自論の持ち主だった。（コネスール編「たばこの「謎」を解く」河出書房新社 2001）

この例のように「論」の内容に対しては疑わしい立場として評する場合に使用されている。別の特徴としては、「…と自論を展開している」「自論をぶったり…」のような表現があり、「他者」の意見を批判的に述べる場合が5件と比較的多く見られる。

ただ、11件中2件が翻訳作品中の例であり、これはが翻訳の際の原語が影響している可能性も考えられる。

次に、「自論」と「持論」について、新聞記事より「自論」が出現する割合の高いブログやX（旧）Twitter）での用例について見ていく。

ブログは Ameba ブログを対象として、期間を2日間に限定して検索すると、件数は、「持論」が115件、「自論」が13件（8.85対1）という結果が得られた^(注2)。ブログでの「自論」が出現する割合は、新聞記事での場合より高くなっている。それでは、ブログ中の「自論」や「持論」はどのような意味として使用されているのだろうか、以下見ていく。

- 5) だからこそ他者の思考や視点も借りて、物事を捉えるって言うことが大切になってくるんだよ。って言ってる私も頭ガッチガチの自論強めタイプ（2024.09.07『Kizuna』西洋占星術（星読み）鑑定士 ふくまり）

この例は「強め」と伴に用いられている。この場合のように昨今では、「自」を強めに出す態度は、批判的に捉えられる傾向があるのではないだろうか。これは例えば、「個」を含む語でも同様で、「個性的」という語も好ましくない意味に使用される場合がある。

次に、X（旧 Twitter）での出現状況について、期間を10日間に指定し用例を見たところ、「持論」が97件、「自論」が33件（2.9対1）収集することができた^(注3)。やはり「持論」の方が多く見られることは他の場合と同じであるが、「自論」が出現する割合が他の調査よりも、最も高くなっていることがわかる。SNSは、いわば「自己」の主張や感情を吐露する場であり、

自分の個人的な考えを述べる場でもあるので、「自論」の使用例が多くなっているという結果にも首肯できる。

次に、コロケーションの観点から、「持論」と「自論」について見ていく。

先の例でも見たように、これらの語に含まれる「論」には「展開」とともに用いられる傾向がある。BCCWJで検索された「持論」と、「自論」を見ると、「展開」と伴に用いられる「持論を展開」が15件、「自論を展開」が3件見られる。また、新聞記事でも毎日新聞では「持論を展開」3249件が、「自論を展開」17件と、「展開」と伴に使用される例は多く存している。

6) あまりにも日本人的な、そしてあまりにも帝国軍人的な自論を展開したに過ぎなかった。(内山勝男『舞樂而留ラプソディー』1993)

「展開」の意味は「くりひろげられること。ひろげてことがおこなわれること」(『日本国語大辞典』)である。「展開」の「広げて示す」という意味から、「大げさな感じ」が生まれ、さらにこれが「誇張」につながると考えられる。

この点について、以下ポライトネスの観点から考えていく。「自論」を「誇張」することは、「ネガティブフェイスを保つ」こととは逆の方向である。ネガティブフェイスを保たないことは、すなわち「丁寧さ」を欠くことになり、これが「批判」という否定的なイメージを生むことになるのではないだろうか。「自論」が、単なる「自分の意見」という意味だけではなく、「広く一般的に認められる意見」ではないと解されるのも共通した理由からであると考えられる。

「自論」の使用例の中で、論の持ち主と筆者(書き手)が一致している場合も見られる。それは、「自論ですが…」という「自分の意見」であることを前置きする使用例である。こ BCCWJ 以外に例を求めるため、Ameba ブログを用い、新たに1か月に期間を定め検索すると、「自論ですが」が23件、四八「持論ですが」83件が得られる^(注4)。これらの例で、「持論」と表記される際には、「自分の持論ですが」「私の持論ですが」のように自分を意味する語と伴に出現している場合が41件(49.4%)と多く存する点が注目される。「自

論ですが」との前置きは、「一般的ではなく、個人的な意見である」としてから自己の意見を表明する方法である。これは「他人に邪魔されたくない」という「ネガティブフェイスを保つ」方法の一つと考えられる。すなわち「自論ですが」には丁寧さを保つ機能があり、緩衝材として使用されるものと考えられる。

この点については、自分の考えを述べる際、次の例のように「個人的には」と前置きをする場合がある。これも類例として考えられる。

7) 個人的には、添加物なしの人間用ワセリンでも使えると思いますが、責任は持てません。(Yahoo! 知恵袋2005)

「個人的には」や「個人的見解」「私が思うに」等の表現を伴うことで、それが他の多くの人とは無関係であり、一般化されているものではないことを示しながら述べる方法である。これは、「自己」や「個」を前面に出すためではなく、自身で「自分寄り」な意見であると表明することは、「ネガティブフェイスを保つ」方法の一つである。前置きとして謙遜の意味を込め、他者からの批判を回避する効果が存しているもの。BCCWJで「個人的には」を文字列検すると840件が存しており、ある程度の件数が見られる。こうした意見の述べ方は、日本語の意見の述べ方として、選択されやすいのではないだろうか。

次に、「置き換え」の観点から見る。「自論」が「持論」に置き換えにくい例は、どのような場合であるかについて見る。

8) ここでのアインシュタインは、自論 (相対論) への執拗な反対者たちと同じ役割を演じた、とする評もあるほどであった。(毎日新聞 2022.10.29)

これは書評に見られる場合である。量子論でのアインシュタインの論が、アインシュタイン自身の相対論を否定するようにも評されるという文脈である。「論」に対する評価が定まっていなくても捉えられる。「持論」には、「長期間支持されている、固定した論」というニュアンスがあり、そうした意味では「自論」より「持論」が使用されるのではないだろうか。

また、「自論」の例を見ていくと、積極的に「自論」を使用していると考

えられる場合が存する。次の場合は、「自論」が個人的な使用ではなくなってきた例である。Yahoo!サイトでWebを検索した結果、見られたもの次のような場合がある。

まず、書名の中に使用されている場合である。

- 9) 「東京焼自作自論：日本 vs. 西欧の拮抗が生んだ焼き物」（中村錦平 美術出版社 2005）

これは、書名の中に使用されている。SNSとは使用される位相が異なっている。

- 10) 「変化の時代における経営人材育成～自論形成を促すヨコ型の学びあい～」高橋俊介 2023.06.08 BBTリカレントサミット）

これは、大学研究所所員によるセミナーのタイトルである。これらの例は「自論」を積極的に使用している例であり、国語辞典に立項されるなど、今後「自論」の使用が広がる方向にあることを示している。

2.4 関連語の考察

ここでは「自論」と関連する語について見ていく。「自論」と類似した語形を持つ場合に、「自論」の「自」と「論」が含まれる語として「独自論」「独自理論」の語がある。以下、これらの用例について確認しておく。

「独自論」

- 11) 若手の中央官僚らと机を並べた近藤さんは、岐阜県の財政難についても「打開策はある」と独自論を展開する。（朝日新聞 2011.08.13）

記事でここでの「独自論」の内容を見ると、「地方自立のために、所得税や法人税がいったん国に入り、交付税や補助金として地方に分配される現在の仕組みを変えるべきだ」という内容である。この場合は「独自」+「論」の構成で「他の人にはない意見」という意味で使用されている。この例では「持論」にも置き換え可能な場合である。

「独自論」はBCCWJでの用例は見られないが、「独自理論」の場合は2件が存している。

- 12) 皆さんが被害者になると泣かされる、「保険会社の独自理論」が目立

ちますね。(Yahoo! 知恵袋 2005)

- 13) 数学の超難問「ABC 予想証明」を証明したとする京都大の望月新一教授の独自理論をめぐって、「理論を修正し、新たに ABC 予想を証明した」とする新理論が登場した。(朝日新聞 2024.07.23)

この語の場合は、「独自」 + 「理論」の構成である。これを縮約しても「自論」は構成されず、「自論」とは別の構成である。また、用例はいずれも「理論」を批判的に捉えている場合に使用されている。「独自」用いることで、「自論」や「持論」より強い意味を持つと考えられる。用例12は「保険会社の利己的な理論」を意味し、用例13は、「独特もしくは特有の理論」を意味する。「独自」とすることは、やはり「ネガティブフェイスを保つ」のとは逆の方向であり、そのことがあまり多くには賛同されない意味を表しているものと考えられる。

また、ブログなどには次のような「独論」の語も見られる。

- 14) その変な余計な焦りは必要ない！と気づき始めている女の子、増えていると思います、(勝手な独論) (アラサー女子のその日暮らし 2024.07.25)

この場合「勝手な」と伴に使用されていることから、「より個人的な考え」であると筆者が認識していることが示されている。「論」という程度のものではないため、「独自論」や「自論」とするよりは、「独論」とし、「個人的な考え」であることが強調されている。自嘲めいた表現として用いられていると場合である。「独論」は、「自論」の場合と同様に、自己の思考や意見を「独論」とすることで、この場合は「ネガティブフェイスを保つ」ための方法として使用されていると考えられる。

なお、BCCWJ では「独論」が検索されず、また『日本語新辞典』にも「独論」は立項されていない。しかし、「独論」のように「独」 + 「〇」で構成される語には、「独言」等があり、こうした語からの類推からこの語も作りやすかったものと考えられる。

ここで「自論」「独論」のように、「自」 + 「〇」、「独」 + 「〇」の場合で共通した場合が見られる語にはどのようなものがあるか、『日本語新辞典』

で立項されている場合を挙げる。

「自演」－「独演」、「自学」－「独学」、「自習」－「独習」、「自白」－「独白」、
「自立」－「独立」、「自力」－「独力」

「自」の「みずから」、「独」の「ひとり」という元々の意味には共通する部分がある。「独」の方が「自分以外の外から見た感じ」を表す。例えば「独演」の記述には、「転じて、会合などで一人で話し続けること。例 きのこの会議は彼の独演会だった。」(『日本語新辞典』)とある。「独演会」は揶揄的な表現である。「独善」も同様だが、他者が評する「独」の場合にはマイナスのニュアンスがある。「自」や「独」は「自ら」に使用される場合は、「ネガティブフェイス」を保つが、他者を評する場合に使用される場合には批判的な意味を持つことになる。

3 「自説」と「持説」について

ここでは「自論」「持論」と同じ「自」＋「〇」、と「持」＋「〇」で構成される語として、「自説」と「持説」の場合について、その意味と使用状況について見ていく。

3.1 辞書での記述

「自説」と「持説」について、辞書ではどのような記述がされているか見ていく。

「自説」

「自分の意見、学説などを主張すること。また、その意見、学説」(『日本国語大辞典』)とある。用例は『末燈鈔』(1333)や『当世書生気質』が挙げられる。多くの辞書で同等の扱いであったが、「〔他と違って自信を持っている〕自分の説(意見)。」(『新明解国語辞典』)とするものがあつた。

「持説」

「ふだんからもっている自己の意見。常に主張している説。持論」(『日本国語大辞典』)とあり。用例は『当世書生気質』(1885～86)が挙げられている。『大漢和辞典』には「説を持する。固く自説を守って曲げないこと。又、其の一定の言論を言う。持論。持議。」とあるが、用例はない。また、前章と

同様に国語辞典15冊での記述を見ると、14冊は「持論」を意味記述中に挙げるか、類義語とするかの扱いがあり、「持説」と「持論」の違いには言及されていない。

「持説」の意味記述の中に、「持論」との言い換えがあり、両者の意味が近いことが確認できる。辞書での記述の違いは、「持説」は『日本語新辞典』に「ふだんから主張している」という意味記述や「^例年来の持説を主張する」とある。辞書の記述では「長い間、継続的に持っている主張」である点が、「自説」より強調されている点にある。

3.2 「自説」と「持説」の出現状況

ここでは、「自説」と「持説」がBCCWJや新聞記事ではどのような出現状況や使用状況を示すのか、用例を見ながら観察し、その傾向を探っていく。

まず、BCCWJで文字列検索を行うと、各語の出現数は「自説」89件、「持説」10件（8.9対1）である。

また、比較のため次の3紙の新聞記事で各語が検索される件数は、以下のようになる。

朝日新聞「自説」1473件、「持説」47件（31.3対1）

毎日新聞「自説」1084件、「持説」51件（21.2対1）

読売新聞「自説」1141件、「持説」44件（25.9対1）

「持論」「自論」では、BCCWJの場合でも新聞記事の場合でも、「持」による造語が多く存していた。しかし「自説」「持説」の場合では、BCCWJでは約9倍、新聞では20倍以上と、「自」による造語の方が多く検索されることがわかる^(注5)。

さらに各語の出現時期を見るために、新聞記事での出現時期を見ると、それぞれ古い例が見られる年代は次のようになる。

「自説」… 朝日新聞1984年 読売新聞1891年 毎日新聞 1952年

「持説」… 朝日新聞1984年 読売新聞1986年 毎日新聞 1991年

毎日新聞で、「自説」が検索される古い例は、次の場合である。

15) 島津忠貞氏自説を捨てて硬派を賛成（読売新聞 1889.12.03）

ただ、用例を見ると単純に「自説」が古く、最近になって「持説」が出現したという訳でもない。「持説」にも次のような場合があり、混同した場合が見られる。

- 16) 今更背かんとならば脱党の上之れを為すべしと答へらるに氏も遂に
持説を枉げざるなりと（読売新聞 1893.03.05）

読売新聞の例は、データベースの検索結果によれば「自説」の表記になっているが、記事本文を確認すると「持説」と表記されている場合である。元記事をデータ化する際に、規範意識が働いたため「自説」が選択されたのであろうか。この例からしばらく「持説」は検索されず、次に例が見られるのは以下の例である。

- 17) 首相側近は、「首相があくまで持説を貫こうとすれば、延長問題解決
の場である両院議員総会でどんな議論になるかわからない。（略）」と
解説する。（読売新聞 1986.09.04）

この例は、側近の発言中の「ジセツ」を記事で「持説」と表記した場合である。両者の区別が判然としない例として、先に触れた『日本国語大辞典』での用例について見る。『当世書生気質』には「持説」と「自説」とが存していることになる。以下、本文にあたり用例を見る。

「自説」

- 18) 読んだ事だけハどうやら斯やら。月夜の螢ほどに記えて居れども。サ
ア自説はと問ひかけると。一句も考案の出ざる質なり。（当世書生気
質 第拾回）

「持説」

- 19) 折々議論めかす事ありと思へば。是又受売の論説にて。自分の持説に
てハあらざるゆゑ。（当世書生気質 第拾回）

これらの例は、須河という書生を批判した一続きの部分に見られるものである。「持説」の方は、直前に「自分の」と書いたために、「自」が重複する「自説」は使用しにくかったものと考えられる。ここで筆者に別の意図があって、本文中「自説」に続いて出現する「持説」を使い分けたのかは、『当世書生気質』の他の部分を見ても判然としないせず、混同していると考えられる。

3.3 「自説」と「持説」の意味と用法

それでは、「自説」と「持説」の意味、用法にどのような特徴があるのか、以下見ていく。

- 20) なのになぜ、人は周囲に「同調」するのだろうか？細胞建築学、日本語・日本文学、振動工学の研究者が持説を展開する。(読売新聞 2021.08.27)

この例は、各分野の研究者の考えについて、記者が「持説」とした場合である。それでは「持説」がどのように使用されているのかについて見る。ここでは、朝日新聞で本文中の例が確認される「持説」47件を確認すると、そのうち45件が「書き手」や「語り手」の説には用いられていない。「説の所持者」は専門家や専門職、政治家などの人物であり、それを評する際に「書き手」が「説の所有者」の考えを「持説」として表現している。自分の説ではないので「自説」ではなく、「持説」が使用されたのではないだろうか。

ただ、次の場合のように他者の「説」の場合でも、その人の所有する考えという意味で「自説」が使用される場合がある。

- 21) ス首相談は自説 ネンニ氏は十九日ゼノアで「英国誌がスターリン氏の考えとして伝えているのは実は私自身の言ったことだ」と発表した。(毎日新聞 1952.09.22)

この例で、「自説」の場合は、「説の所持者」と「書き手や語り手」が一致している。「他者（ここではスターリン氏）の説であるかのように述べたが、実は自分（ネンニ氏）の説だった」という内容の記事である。この例では「持説」には置き換えにくい。ネンニ氏が長期間固定的に持っている説という意味ではないからである。

この場合の「自説」は、「個人的な偏った考え」との、批判的ニュアンスが生じる。

四一

「説の所有者」が、「自説」を用いると、「ネガティブフェイスを保つ」ことができなくなり、丁寧さを欠くことになるからである。

ところで、「論」と「説」にはどのような違いがあるのだろうか。それが「持論」「自論」「自説」「持説」の出現状況にどのように影響しているのだろうか。

次に『日本語新辞典』の記述を引用する。

「論」…筋道をたてて物事の道理を述べたり、ある事柄に対する意見を述べ立てたりすること。また、その述べられた考え、意見。

「説」…筋道をたてて述べられた考え。ア 意見。主張。イ ある学問の中で、筋道をたてて述べられた考え。学説。

辞書の意味記述では、どちらも「筋道をたてて述べられた考え」であり、あまり違いは見られない。

ただ、「説」と「論」については、合成語を構成する際に違いが見られる。それは、例えば「天動説」「地動説」のように、「○○説」は構成されるが、「○○論」は構成されないといった場合である。また反対に、例えば「一般論」「意味論」は「○○説」にはならない。この違いを考えると、「説」のほうがやや小さいものであり、「論」の方はそれより体系的な考えであるというニュアンスがある。これに従えば、自分の考えを「自論」と大きなものと表現するのは憚られ、より小さい「自説」という方が、「ネガティブフェイスを保つ」ことになる。

さらに、「自説」と伴に用いられる語や使用状況に何か特徴は見られないだろうか。以下、用例を見る。

「自説」

22) キベット氏は自身が持つラジオ番組の中で、かなり奇抜なとも思われる自説を展開しているのだ。(俊平の雑学研究所 2024.02.03 アメーバブログ)

この例では「かなり奇抜」な説であるとされ「独自性」が強い論に対して用いられている。やはり「展開」とのコロケーションもあり、この場合マイナスのニュアンスがある。

「持説」

23) 彼は植民地無用の持説を修正し、「原料供給」面における満州の重要性を初めて認めた。(姜克實「石橋湛山」1994)

この場合は、「今まで持っていた説」という意味である。

「持説」は、その人物が持っている固有の説という意味であり、固有であ

ることが、一般性を欠き、偏っているという意味を持ちやすくなる。

ここで、BCCWJで検索される場合の、「展開」とのコロケーションを見ると、「持説」の場合は見られないが、「自説を展開」は6件存している。

新聞記事では以下のようなになる。

持説を展開 朝日新聞8件 読売新聞…9件 毎日新聞 9件

自説を展開 朝日新聞173件 読売新聞…146件 毎日新聞 183件

24) 作家的確信から稗田阿礼は日本最初の女性作家、日本語の父は天武天皇といった持説を展開。(朝日新聞 2008.10.05)

この例では「作家的確信」とあり、作家自身の「個人的な考えで裏付けのない説」に対して用いられている場合である。広く認められる説ではない場合に使用されている。

25) 「女性の社会進出など、女性の家庭逃避か、男性の甲斐性のなさと同義」などと持説を展開した。(毎日新聞 1999.03.11)

この例では、これに続く部分に「女性の社会進出を否定している」との批判が相次ぎ、とある。やはり「持説を展開」という表現は、説に対して批判的な意味として捉えられる。新聞記事での26件を見ると、いずれも極端な意見に対して使用されている。

また、これに類するコロケーションとして、「持説を披露」が4件あるが、これも同様に批判的な意味で使用されている。「披露」には「めでたいことを人々の前に広く示したり、限られた人を前に私的なことを知らせたりすること」(『日本語新辞典』)という意があり、「広く示す」という意味が、やはりマイナスのニュアンスを生じさせるものと考えられる。

これらの表現は、書き手としては批判を直接明言はしないものの、意味する内容は批判的であることが読み取れるものである。偏った立場ではないことを示そうとする記事の書き手にとっては、立場を明言せずに批判的な意味を表明するのに、都合の良い方法であると言える。

3.4 関連語の考察

ここでは「自説」「持説」に関連する、「○」+「説」の場合について見て

いく。

「自説」は、「持説」より個人的な偏りのある意見の場合に用いられている傾向が考えられるが、これに関連する語として「私説」があり、さらに「論」が後接している「私論」の語がある。まず、『日本国語大辞典』での記述を見ていく。

「私説」まだ公に認められていない、自分個人の説。個人の意見。

「私論」公の論に対して個人的な意見、見解。また、自分勝手の議論。

出現状況について見ると、BCCWJには、「私説」5件、「私論」4件が見られる。以下例を挙げる。

26) 文教普及会での取り決めに、私論として再度批判したのだった。(内山勝男『舞楽而楽ラブソディ』1993)

27) 大手で中堅どころといたら、日東駒専ですか？ぐだぐだ私論をかます馬鹿どもが多いようですが、いくつもの大手予備校が日東駒専が中堅大学と言っています。(Yahoo!知恵袋2005)

ここでは「私論」とすることで、自分の考えとは異なる相手の考えを、より個人的なものであることを意味し、さらに自分にとっては「認めがたい考え」であることを示している。「私」には「個人的」であるがゆえに、万人向けではなく「偏っている」というニュアンスが付加されている。

さらにBCCWJには「私説」の語も5件見られるが、うち4件は『私説古風土記』や『私説聊齋志異』等の書名の一部である。残る1件は、次の例である。

28) せっかく「私説」と書いているんだからさ、榊妹の他にもオリキャラとか、もうちょっと何というか、ゆったり書いて見たらいかが。(中島梓「小説道場」1992)

また、Yahoo!知恵袋には次のような質問や回答が載せられている。

29) 自説、私見の意味はどう違うのですか。教えてください。(Yahoo! 2017. 11.30)

これに対するベストアンサーには、「自説が「自説を唱える」「自説に固執する」「自説を曲げない」と使われるように、それを正しいものと確信して

いる場合に使われるのに対して、私見は「私見ですが」「私見を述べますと」「私見に過ぎませんが」などと”自分一人の意見・見解であり、誤っているかも知れませんが“という謙遜の意を含んでいるところが違います。」とある。これによると「自」より「私」の方が、よりプライベートな意味で使用されると認識されるためか、「ネガティブフェイスを保つ」程度が高いことになる。

最後に、関連する意味を持つ、「私」+○、「自」+○、「持」+○により構成される他の語の造語力について見ておく。

「私」+「○」は、『日本国語大辞典』に立項されている語を見ると

「私」の場合は、「私愛、私悪、私案、私意、私印、私雨、私営、私栄、私益、私謁、私宴、私怨」等、異なり語数で174語と多くの語が見られる。

「自」+「○」の場合は「自印、自営、自演」等、異なり語数で184語である。

これらに対して、「持」+「○」の場合は、「持戒、持久、持参」等、33語存しており、「私」「持」に比べるとあまり多くないことがわかる。

以下、これらの要素で構成される語で、後接要素が同じ場合について見ていく。

「私」—「自」が存する場合は、次の5語である。

私営—自営 私己—自己 私選—自選 私宅—自宅 私費—自費

「私営」と「自営」の出現状況について、BCCWJでの用例を見ていく。

「私営」43件

30) 経営はどこがしているのだろう。公営なのか、私営なのか。(東海林 さだお『オール讀物』2004)

「私営」については、中国の企業形態が「公営」であるか「私営」であるかについて用いられる場合が多く、個人的である意味が表現されることがわかる。また、「自営」は673件見られるうち、「自営業」として用いられている場合が499件である。「私」より「自」の方がより小さい単位に使用されていることがわかる。

さらに、「自」+「○」と、「持」+「○」で後接要素が同じ場合が、存する語には、次の7語がある。

自説—持説 自論—持論 自戒—持戒 自浄—持浄 自明—持明 自用—持用 自律—持律

これらの語のうち「自説」—「持説」、「自論」—「持論」以外の語の場合では、「持」を含む場合は、仏教語であることがわかる。やはり「持」と「自」の意味が近いという訳ではなく、類義関係を持つ場合は限定的であるという事になる。これが「自論」の場合以外では、「私」と「持」とが紛れなかった要因であると考えられる。

4 まとめ

本稿では、「自論」、「持論」および「自説」、「持説」の用法について調査した結果、次のようなことがわかった。

「自論」<「持論」、「自説」>「持説」のように、どちらが多く使用されているのかには違いが存する。これには、以下の理由は考えられる。

「自論」は、先に存在した「持論」と同音であったことや、いずれも自分の意見について使用されること、などの混同しやすい要因があったため後に生まれた語である。「自論」は次第にブログなどでの個人的な使用だけでなく、誤りと解される場合もあるが、一部の辞書では立項されるようになった。

また、「自説」が「持説」より多く出現するのは、「自説」の方がより「個人的な考え」であるという意味で用いられるためと考えられる。

「自論」や「自説」は「自己」を前面に出す意味を持つ場合や、「展開する」などの語と伴に使用され、より「個人的な考え」である意味が強調される場合がある。そのことはポライトネスの観点から見れば、「ネガティブフェイスを保つ」こととは逆の方向であると捉えられる。「ネガティブフェイスを保つ」ことができなければ、マイナスのニュアンスを持つ場合が生じるため、こうした結果が得られるものと考えられる。

注1 朝日新聞クロスサーチおよびヨミダス、毎索（毎日新聞記事データベース）、によるデータは2024年8月12日までに検索を行った結果である。

- 注2 Ameba ブログでの「自論」は、9月6日、7日の二日間の検索結果である。
- 注3 X (旧 Twitter) での検索期間は、2024年8月23日～9月1日。
- 注4 ブログの「自論ですが」「持論ですが」は、2024年8月23日～9月22日の一か月間の検索結果を示す。
- 注5 この調査件数は2024年10月15日に検索した結果を示す。また、「持説」より「自説」が多く使用されるケースとして、Xの日経校閲というアカウントでは(2022.09.09日@nikkei_Kotoba)に、2840票の67%が「自説」を用い、26.6%が「持説」を用いるという Web を使ったアンケートの調査結果がある。

参考資料

毎日新聞社のデータベース「毎索」(g-search.or.jp)
朝日新聞クロスサーチ朝日新聞クロスサーチ (asahi.com)
| ヨミダス (yomiuri.co.jp)
明治の文学第4巻 坪内逍遙 (坪内祐三他編 2002年9月 筑摩書房)
クス)

『日本国語大辞典』第2版(松井栄一他編 小学館 2000年12月) / 『日本語新辞典』(松井栄一編 小学館 2005年1月) / 『例解新国語辞典』第2版(林四郎他編 1987年2月) / 『学研 現代新国語辞典 改訂第六版』(金田一春彦・金田一秀穂 2017年12月 学研プラス) / 『明鏡新国語辞典』(北原保雄 大修館2002年12月) / 『旺文社国語辞典 第10版』(旺文社2005年10月) / 『集英社国語辞典第3版』(集英社 2012年12月) / 『三省堂新明解国語辞典 第八版』(山田忠雄他編 2012年2月) / 『三省堂ハイブリッド新辞林』(1998年10月) / 『小学館 新選国語辞典第9版』(2011年1月) / 『岩波国語辞典 8版』(2019年11月) / 『三省堂現代新国語辞典 第二版』(市川孝他編 2004年1月) / 『三省堂国語辞典 第八版』(見坊豪紀他編 2022年11月) / 『講談社国語辞典 第三版』(阪倉篤義他編 2004年11月) / 『デジタル大辞泉』 / 『大漢和辞典』(諸橋轍次編 1960年5月)